

平成 万葉の旅

広島県福山市

吾妹子が見し鞆の浦のむろの木は常世にあれど見し人そなき 大伴旅人

(訳) わがいとしい妻が往路に見た、鞆の浦のむろの木は、長く命を保っているのに、見た妻は今ももういない

中西進「万葉集 全訳注原文付」(講談社文庫)より

さを心にとめず 笑みて暮らさしき

帆足さんが、福山市の能楽師・喜多流大島家から、地元ゆかりの能の作品を、と頼まれたのは1999年のこと。旅人の歌が浮かび、残された父と旅人が重なった。初めて新作を引き受け

なれば」と願いを込める。旅人の見たむろの木は、鞆の浦に現存しない。どこにあったか、今のどの木にあたるかも定かでない。だが、1300年たっても変わらぬ夫婦の愛が、港近くの歌碑に息づいている。(福山支局・諏訪智史)

妻失った悲しみ深く

た。

福山藩の儒学者で詩人の菅茶山が旅人の霊に会い、妻への思いに感動する筋書き。舞台では、ひたすら挽歌を詠じる旅人の前に、郎

「ポニヨ」の構想練る た記録もある。さらに、幕末には、

「ポニヨ」の構想練る

「ポニヨ」の構想練る た記録もある。さらに、幕末には、

「鞆」とは、弓を射る時に使う革の防具のこと。地名との関連ははっきりしないが、鞆の浦は古くから景勝の地として知られ、最近では、宮崎駿監督がここに滞在して、映画「崖の上のポニヨ」の構想を練ったとされる。

江戸時代の朝鮮通信使は、宿館から見える海と島を「日東第一形勝」(日本で一番美しい景勝地)とたたえた。オランダ商館医シ

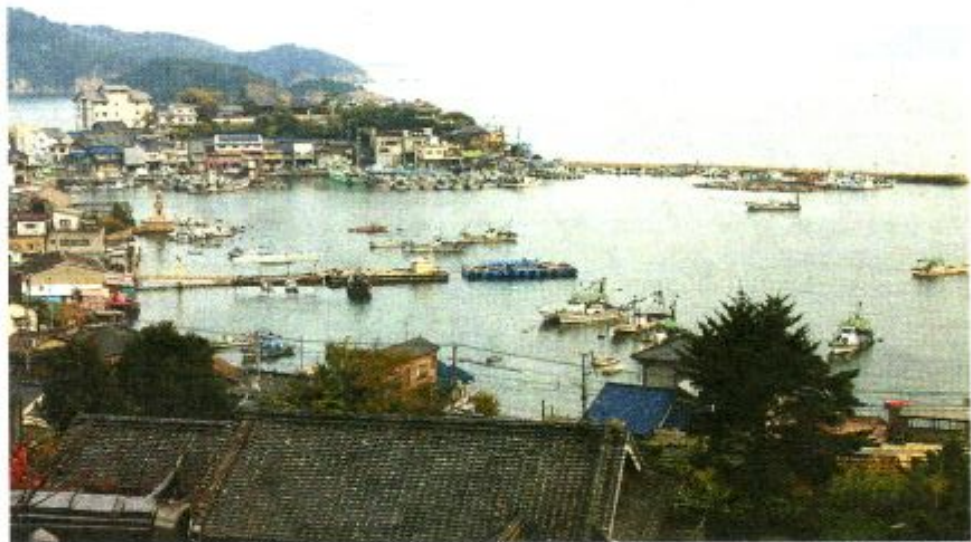
旅人の歌は、帆足さんの両親の思い出につながる。時は昭和の初め。母は専門学校の国文科を中退し、19歳で父と見合いをした。「嫁に行ったら、歌などやっていられない」と、大事にしていた解説本「万葉集略解」を友人に譲って踏ん切りをつけた、と聞いた。相手をよく知らないまま

始めた新生活。母は、父の書架に「万葉集略解」を見つけた。サラリーマンの父も、文学を志したことがあった。一冊の本をきっかけに、二人は互いに歌を詠み合うようになったという。ところが、一家は兵庫県鳴尾村(現・西宮市)にいた1945年8月6日、空襲に遭う。母は犠牲となり、父は万葉を語り合った15年を振り返って歌にした。嫁ぎきて十有五年 貧し

瀬戸内海のほぼ中央に位置し、古くから潮待ちの港として栄えた広島県福山市・鞆の浦。江戸時代の面影を残す町並みを抜けると、初冬のやわらかな日差しが注ぐ小さな港が眼前に開けた。

730年(天平2年)の年の瀬、66歳の大伴旅人は大宰府での勤めを終えて都へ戻る途中、再び、この港の「むろの木」を仰ぎ見た。行き道の道をともした妻の郎女は、すでにない。追慕の念と寂寥感を、磯の大木に託した。

「同じ感動を語り合える人を失う悲しみは、いつの時代も変わりません」能楽の森田流笛方の傍ら、旅人の歌を題材に能の新作「鞆のむろの木」を書いた帆足正規さん(77)(京都府宇治市)は、そう語る。



天然の良港とされる鞆の浦。静かなたたずまいの港には今、漁船が集う(広島県福山市で) 宇那木健一撮影

◆メモ◆ 福山市鞆の浦歴史民俗資料館(084・9902・1121)は、漫画家・やなせたかしさんが、鞆の浦ゆかりの万葉歌を挿入した書6冊を所蔵。不定期で公開している。

